

## ミツカン水の文化 第14回里川文化塾

「大久保長安・八王子の治水とまちづくり」日時：2013年9月7日（土）

「石見土手と浅川の治水」ナビゲーター 鈴木泰さん

吉田さんに八王子のまちの由来、福島さんに大久保長安についてお話いただいたので、私は少し昔の浅川治水の話を中心に、お話を進めたいと思います。浅川は流速が速く、大都市の真ん中を流れています。治水面から見ると現代においても、大変危険な川であると認識されています。



八王子市内の旧家に伝わった絵図の一部

### 浅川治水の古記録

現在につながる八王子宿や千人町などの初期の整備（検地、街道整備、治水など）を主として担ったのは大久保長安とその配下の代官や手代たち、千人同心などでその多くは甲州系の人たちでした。

八王子の古地図は何枚も残されていますが、その一枚には、太い線で堤防のようなものが描かれていて、何らかの強固な堤防がつくられていたと推測できます。江戸時代にも「ここだけは破れてはならない」という強い思想の下に、治水が行なわれていたことがわかります。

### 『武蔵名勝図会』

浅川治水の古記録としては、1823年に完成した植田孟縉の『武蔵名勝図会』に『天正年間に大きな洪水が起こった。南浅川は平岡町付近で浅川と合流していた。大久保石見守長安が大きな堤を築いた』ということが書かれています。

原文は

「天正の初めに北条氏八王子城居の頃、小仏川、櫛田川出水して、今の散田新地というところは川瀬となり、それより今の千人町通りを流れて、本郷村の下より浅川へ流れ入りけ

る由。その後、八王子城陥りし後に、城下町の亡民を今の八王子町へ引移されし後も、洪水またも島之坊宿辺より市中に流れ入らんとせしかば、石見守下知を伝えて、由井領、小宮領、日野領の村々へ課せしめて町囲いの長堤を築けり。新地と千人町の堺なる地蔵堂の脇より千人町裏通り、馬場地の南付の土手へつづき、宗格院脇より島之坊宿の限りへ出でて、本郷多賀神社の裏通りより、同村田圃の辺まで、上は坤（ひつじさる、南西）の方より艮（うしとら、北東）の方へ凡そ長さ十四、五町（1.5から1.6km）、敷三間余（9m）、高さ七尺（2.3m）ばかりなり。石見守の功を持って築営せり。村民水害を避けければ、土人称号して石見堤という。」—『武蔵名勝図会』より

部分的に解説すると、大久保長安が八王子に来たのが1590年（天正18）から後。天正初めというのは、それ以前の北条氏の時代ということです。小仏川、櫛田川というのは、現在の南浅川を指します。島之坊宿というのは日吉八王子神社付近のこと。明治になって神仏習合政策で神社になりましたが、江時代には日吉八王子神社と山伏が勧進していた島之坊というお寺がセットになっていました。大水がしょっちゅう出るので、本郷多賀神社の裏通り、つまり今の八王子市役所のそばから田んぼの辺りまで、石見守、つまり長安が堤防をつくりました。その堤防の規模は、長さ1.5～1.6km、敷9m、高さ2.3mというものだった、ということです。

この規模の堤防というのは、午前中に見ていただいた水無瀬橋近くの霞堤ぐらいの大きさです。『武蔵名勝図会』の記述がああ場所の堤防そのものを指しているかどうかは定かではありませんが、そのように想像することができます。

ちなみに、まち歩きするときにも話題に出ました大善寺というお寺は、大善寺学舎といわれる学校でもありました。ここではさまざまな学問が教えられていました。神奈川県南足柄を流れる酒匂川の治水工事で有名な田中丘偶（きゅうぐ）は、現在のあきる野市の千人同心の出身で若いころに大善寺学舎で学んだといわれています。

南浅川の治水でいうと、長安の時代からは下りますが万治年間（1658～1661年）に設楽左衛門という人が、高尾の辺りで川筋の付け替えの治水工事を行なっています。

石川日記にも、南浅川の治水についての記録があります。石川日記というのは、代々甲州武田家の家臣で、のちに徳川家に仕えた石川家の石川善兵衛が、1720年（享保5）年4月に書き始め、今日まで200年以上続いて書き継がれている農事日記です。

石川善兵衛は千人同心として半土半農の生活を送り、毎日の天気、畑、山の仕事、穀物の作付け、収穫高、生活記録、日光勤番などを書き綴りました。諸色覚日記ともいわれ、浅川地区の昔やそのころの様子を知る上でも貴重な資料になっています。例えば新撰組が甲州に行ったときの天気はどうだったのか、など、全部調べられます。近世の歴史小説を書くためには、欠かせない史料になっています。

石川日記には、小規模な水害は記録されていますが、宿全体に被害が及ぶような大きな水害は書かれていません。大久保長安が治水を施してからは、江戸期を通じて壊滅的な水害には見舞われていない、とあっていいのだと推測できます。

ちなみに『多摩川史』に、1910年（明治43）8月の洪水（関東大水害）について「支流

の南浅川では南浅川橋上、水無瀬橋下でそれぞれ右岸堤が決潰し、平野面のほとんど全面と上流部における低い段丘、小扇状地の周縁部とが浸水を豪った。平野面での浸水深は1～1.5m、湛水期間は0.5～1日であつた」とあります。

吉田さんも福島さんもおっしゃっていましたが、八王子というまちは、河川と道路の骨格が長安によって決められて以来、400年経っても大きな変化がありませんでした。周縁部がスクロール的に広がっているだけで、八王子のまち自体は高度に完成されていた、ということができるとでしょう。

『新編武蔵風土記稿』（文化・文政年間〈1804～1829年〉）に場所によっては川幅二町（600m）と書いてあります。今日見ていただいた浅川橋の長さが約150mですから、その4倍の川幅があるというのです。普段の水深は浅いけれど、水が出たら暴れ回る川で、今よりずっと広い河川敷を持っていたのでしょ

## 霞堤の役割

今日の堤防と同じ位置（八王子宿の北と千人町）に石見土手が築堤されたというのは、間違いないでしょう。そして南浅川と浅川との合流点を西へ付け替えて、本流に対して直角に当てて水勢を削ぐように工夫しました。このときにつくられた石見土手と呼ばれる堤防は、霞堤という形につくられました。

霞堤の役割には以下のようなものがあります。

- ・流速を抑えつつ水をじわりと堤内に導き、水や細かい土砂は流入するが重い木石などの流入を防ぐ。
- ・水が堤防を壊すのを防ぐ。

これは、堤防というのは一方の側だけから水の圧力がかかると崩壊しやすいので、堤防の切れ目から裏にも水を入れることで（裏水）水を支えにして堤防を崩れないようにしてやる、という考え方です。しっかりとつくられた堤防なら、この方法で崩れにくくすることができるそうです。

まち歩きするときにも言いましたが、江戸時代の技術でもあれほどの川でも真っ直ぐにしたり、付け替える技術は持っていたのです。では、多くの支川がなんであんなにくねくねと曲がったままだったかという、川の水が出るのを遅くするためにわざと曲げたままだったのではないかと考えられます。本流の増水を遅らせるために水をゆっくり流したり、水があふれても田んぼが遊水池になってくれることで、洪水を防いでいたのです。

## 古記録がない、浅川左岸

右岸に比べ浅川左岸の治水の古記録はまったくないのです。それで古地図、航空写真、現在の水路から推定するしかありません。

1882年（明治15）の迅速図を見ても、左岸側にはまったく堤防がつくられていません。それが近代になって、浅川左岸に堤防がつくられます。大和田付近から中野上町まで連続してつくられるようになったのは、水田や明治以降に増えた繊維関係の工場や住居を守るためです。特に昭和になってから、第二次大戦前後に食糧増産をする必要が生じ、圃場整備が行なわれ、田んぼを遊水池にしておけなくなったからです。

浅川の左岸側には現在の堤防から200~300mぐらいのところに10mほどの段差があって高台の向こう側に〈川口川〉という川があります。高台の浅川側には通称 清水川という用水路が縦横に張り巡らされています。用水の落ち水は普通だったら浅川に落とすところを、等高線に沿って流し、最後は山に向けられて川口川に持っていかれています。清水川は、高台から流れてくる水を浅川に入れないように、川口川へ水を導くという役割を果たしています。

迅速図には川口川の合流点から浅川と並行して東に向かう太い水路がありましたが、近年の堤防の整備に伴ってなくなったようです。このことから、用水路が単に利水の観点からだけでなく、治水の機能も果たしていたことがわかります。

南浅川と浅川の合流点から1kmぐらい上流の浅川左岸、榎原町付近には広大な雑木林がありました。今でも若干残っていますが、ここも遊水地を兼ねていたと思われます。洪水のとき、崖線下を等高線に沿って走る水路と雑木林や水田を遊水地にすることで時間稼ぎをした水は、ゆっくりと本流に向かったのではないのでしょうか。

昭和の初めごろまでは、もっと上流の山入川合流点下流から榎原町まで続く雑木林の辺りには堤防がありませんでした。実は私は浅川左岸で育ったのですが、その付近の低地の住宅には農家であっても土間のない家が多かったのです。内水氾濫を想定した暮らしの知恵だったのではないのでしょうか。



遊水池の中を縦横に巡る、旧片倉製糸工場付近の清水川（通称）。

赤線は、付近の崖線下の湧水が源流の水路を表わし、

青線は、1km以上上流の榎原町付近の雑木林（遊水池）から続いている水路を表わしている。同じように見える水路も、多様な源流を持っていることを示している。

## 八王子宿付近の浅川右岸

八王子宿を水から守るためにも、右岸側には今日の平岡町~明神町付近まで強固な堤が整備されました。霞堤の切れ口が途中の田町、明神町付近にありました。

旧大善寺や極楽寺、新町の一里塚などの大事な施設は自然堤防につくられ、河川敷からは少し高台になった安全な土地でした。

地図で浅川と南浅川の合流点を見てください。石見土手の所から川が直角に曲がり、浅川に南浅川をぶつけるようになっていきますね。一番雨が降るとき、つまり梅雨と台風の時

期には八王子の雨は南西側から降り始めるのです。ということは高尾山からくる水（南浅川）の流出ほうが早い。陣馬山（浅川の本流）のほうが遅くなるし流域がはるかに広い。この感覚は八王子に住む人間にとってリアルなものです。これはあくまでも私の想像ですが、先に出てきた南浅川の水の勢いで浅川の水勢を削ぐためにと、浅川に南浅川をぶつける形につくったのだと思います。

この治水を行なった大久保長安たちは、流出時間、流速、水位、流量などを細かくチェックして、このような時間差までも考えた治水計画を立てたのだろうかと感心させられます。



南浅川が浅川に直角に合流している。武田信玄が、山梨・甲府の釜無川に御勅使川（みだいがわ）を直角にぶつけて水によって水勢を削いだように、南浅川と浅川の関係も甲州流治水の影響があるのではないか、と鈴木さんは指摘する。

## 江戸のはじめの八王子

秩父～奥多摩～八王子は2万5千石の徳川家の直轄領で代官が治め、山の根（概ね青梅以西の通称）といわれていました。山の根地域は関東平野の西の端で隣国は豊臣系で敵。徳川家の最前線として、八王子は統治と軍事の拠点となりました。1590年（天正18）に宿の移転など大久保長安たちによる八王子のまちづくりが始まりました。

1599年（慶長4）が関ヶ原の合戦ですから、天下の帰趨が定まるのはそれ以降です。八王子のまちづくりが行なわれた初期には徳川家の基盤はまだまだ盤石ではなかった。その対策として、新たに領地になった関東で多くの浪人を体制側に吸収しました。

八王子では北条浪人を中心とした宿場整備が行なわれ、国境に近い甲州街道の西側には、徳川家と一緒に甲州から移ってきた小人頭（道筋奉行）を中心に一緒に移ってきた甲州系の足軽や浪人を取り立てて武士集団（後の千人同心）が創設され、軍事や治安維持などにあてたと考えられます。

千人同心は、約250人から始まって⇒500人⇒1000人、と几帳面に倍々にしています。余談ですが後に大久保長安は奈良でも晒（さらし）の規格をつくっていますし、一里塚や検地の縄もつくっています。

そうした合理性を重んじながら、まちづくりでは（おそらく軍事的な拠点という意味もあったと思いますが）精神的な支柱となる社寺仏閣も大事にしています。宿の北部では大善寺、極楽寺。南部には文字通り寺町という寺院の集積、宿の中央部添って市守神社、八幡八雲神社、多賀神社が並ぶなど、社寺の再配置を行ないました。高尾山、日吉八王子神社、子安神社などに既存の社寺も大切にしています。

このようなまちづくりのすべての前提になったのが「治水」だったのだと思います。

## 八王子一水と緑と丘陵のまち

八王子は、山地の小仏層、平地の上総層群、沖積層、丘陵の関東ローム層という、変化に富んだ地形のおかげで多様な水道（みずみち）に恵まれてきました。

つい最近も、100万年まえのメタセコイア、ステゴドンなどの化石が人が住んでいるすぐそばで見つかっていて、昔から生態系も多様であることがわかります。

多様な地形と生態系が豊かな水を育み、表流水は言うに及ばず、浅層水と深層水にも恵まれていて、治水さえかなえれば豊かな暮らしが営める地だったのです。扇状地のメリットを生かして、縄文時代からずっと人の暮らしが続いてきた土地であることを、市内各所の遺跡が物語っています。

高尾山の麓に廿里町（とどりまち）という所があって、横浜、川越へそれぞれ10里という意味だ、といわれています。江戸へは12里です。10里というのは、当時の足早の人が1日で歩ける距離でした。つまり海、山、平野の交差点に位置しているのです。水と平らな土地があったばかりでなく、拠点となる都市との距離や位置関係にも恵まれていました。また、浅川は急流とはいえ酒匂川や富士川などと比べると流域面積が狭く、源流部の山脈も低くて地形全体が穏やかです。

八王子は江戸時代から宿場と商工機能を兼ねた都市として発展し、今では56万人の人口を支えるまでになりました。その最初のきっかけをつくったのが、今日でも通用する八王子の治水と道路のプラン、都市計画をつくった大久保長安たちなんだ、と思います。